

上記の本は、米国聖公会の牧師をし、現在は神学校や諸大学で客員講師をしているジョン・シェルビー・スポング氏が書いたもの（JESUS FOR THE NON-RELIGIOUS）を富田正樹教師が翻訳し、新教出版社から出されたものである。スポング氏は、無宗教の一般人にも受け止められる神学を説いている。伝統的な聖書の読み方を変えて、下記のように主張している。マタイ、ルカ福音書が伝えるイエスの降誕は史実ではなく、神話的に構成されている。イエスの病人の治癒、自然の奇跡、死人の復活も事実ではなく、ユダヤ的な文脈の中で記述されている。イエスの受難と十字架に関しては、弟子たちに裏切られ、孤独の中でローマ人に殺されたことは確かであるが、マルコ福音書を基礎とする受難物語は典礼的に書かれている。イエスの復活も肉体の蘇生ではなく、典礼的な記述である。

受難物語は、関わった人々が生き生きとドラマチックに描かれているので、これが典礼的に構成された記述であると聞くと、少し残念であるが、スポング氏の主張は大方納得できる。理性的に読めば、当然であろう。無理矢理に信じよと言うのには抵抗がある。私は「聖書は神の言葉である」というテーゼを知らず、他の本と同じような感覚で読んだ。そして聖書は、神信仰に立った者たちによって神話的・寓話的に書かれたものとして受け止めた。しかし、その中に人を立たせ、生かす素晴らしいメッセージがあると引き込まれ、信仰に入る決定的な動機になった。

スポング氏は伝統的な教理・教義理解を超えて、イエスを探求し、命の神秘、存在の神秘へと眼差しを向けることができるという。イエス物語はユダヤ教に根深く既定されている。イエスの十字架の死は過越の小羊の生贖の「贖い」を意味している。この意味を理解するイエス体験が人間の疎外、孤独、罪を一掃し、神と一体化し、互いが一つになる目を開いてくれる。パウロは、この事実を「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしのうちに生きておられるのです」と書いている。ダニエルが預言した超自然的な「人の子」を福音書記者たちはイエスに当てはめている。そのイエスは「あまりにも完全で、あまりにも解放的で、あまりにも自由で、あまりにも自分自身に正直であったが故に、人びとはこの人の命を通して自分たちの命に聖なる神がやってきたと確信するようになった。それが人間イエスである。神はキリストの内におられる。そしてその神は全人性を創造した愛だった」。第二イザヤはユダヤ人国家の再建はできないとの失意の底から、強さによるのではなく、無力な人が負った傷によって人の病を癒し、無残に殺されることによって人の罪と過ちを執成す「主の僕の歌」を歌った。イエスは「主の僕」のように、無力を受け入れ、死へと赴いた。その死が無力を根底から覆す命を証した。イエス物語はユダヤ教の枠組みの中で構築され、イエスに神のリアリティを描き出している。

スポング氏は「神はキリストの内にいる、… イエスの人格において私たちは神と出会うのだと断言する」。その神は不安を解消し、また自己正当化のための「有神論」の神ではない。イエスは「永遠の今」を生き、愛と赦しを現された。十字架は生きよ、愛せ、存在せよと私たち呼びかける神の臨在の象徴である。イエス体験は、人間が神的なものに関かれ、聖なるものが現実となる命を輝かすものである。イエスを通して偏見、差別、抑圧から抜け出し、私になること、愛することが神の命に与る道である。最後に「私は神へと至る道を信じている。私はきわめて人間らしいイエスにおいてその神と出会ったのである。シャローム!」と締めくくっている。スポング氏は、伝統的な聖書理解に立つキリスト教社会の身勝手な人間否定から、イエスを問い直し、人間回復への変革を訴えている。